

原田宗彦様インタビュー

経歴

早稲田大学卒業後海外へ留学。ロンドン経済政治大学院 (London School of Economics)、アジア・アフリカ研究所 (SOAS) やジュネーブ高等国際問題研究所 (IUHEI) で主に国際関係学を学ぶ。国際機関等でインターンやコンサルタントをしたのち、1999年より JPO としてジュネーブで国連機関に就職。国連東ティモール支援ミッション (UNMISSET) で事務総長特別副代表特別補佐官や国連コソボ暫定行政ミッション (UNMIK) で官房長室政務官を務めたあと国連平和維持活動局 (DPKO) 本部にてコソボ担当政務官として勤務 (2006 - 2009)。国連スーダンミッション (UNMIS)、国連南スーダン共和国ミッション (UNMISS) 政務官を経て、2013年より国連キプロス平和維持軍 (UNFICYP) 民政部に所属。

国連フォーラムインタビュー第 47 回 2007 年 7 月 23 日

<http://www.unforum.org/unstaff/45.html>

Q. 現在のお仕事について教えてください。

1964 年から続いている、部隊を設けている PKO の中では一番古い国連キプロス平和維持団 (UNFICYP) で民政官として勤務しています。ミッションの任務は大きく 3 つの柱に分けられます。1) 紛争の再発防止、2) 法と秩序の回復と維持への貢献、そして 3) 通常の状態への復帰 (Return to normal conditions)。第 3 の柱については、「通常の状態」が「紛争のない状態」をさすのかもっと踏み込んだ意味なのかは議論の余地が残っていると思います。ひとつずつ説明しますね。紛争の再発防止については、主に国連軍が中心的役割を担っており、緩衝地帯を舞台に停戦ラインの監視や対峙する南側のギリシャ系キプロス軍と北側に駐留するトルコ軍との調整をしています。法の秩序の回復と維持への貢献については、国連警察が主導し、やはり緩衝地帯が舞台となります。緩衝地帯をパトロールして、国連の許可を得ていない活動をしている市民の取り締まりや、南側のキプロス警察と北側のトルコ系キプロス警察との調整を行います。第 3 の「通常の状態への復帰」については、民政部门が主導ですが緩衝地帯内の市民活動が問題になることがほとんどなので実際は民政部の活動はすべての 3 つの柱の任務に貢献しています。緩衝地帯に権益を保持している地方自治体、南側のギリシャ系キプロス共和国外務省、北側トルコ系キプロスの「外務省」

との調整が主な役割です。

私の仕事に関して言えば 2018 年に国連本部により、国連キプロス平和維持団の戦略的見直しがおこなわれました。国連事務総長の安全保障理事会への定期レポートを通じた報告の結果、緩衝地帯における許可されていない市民の活動が停戦ラインでの緊張を高めることがないように、ミッションの調整機能を強める目的で民政官を首都ニコシアから地方セクター（地方セクターといっても私の担当するセクターは車で 20 分くらいの距離ですが）へ異動する旨の勧告が出されました。民政部にはチーフと我々国際スタッフの民政官が 3 人おり、その 3 人が各々 3 つのセクターに異動しました。国連軍と警察と民政部が統合された軍人 5 人、警察官 2 人、現地民政官 2 人、現地サポート職員 2 人と合計 11 人となるオフィスをつくり、そのチームリーダーとして 2019 年より緩衝地帯の安全な環境作りに務めています。緩衝地帯の安全が、対峙する南側ギリシャ系キプロス軍と北側トルコ軍よりも一般市民の活動により損なわれるケースが増えて来ているのを受けて、軍主導であったミッションが本部はもとよりセクターにいたっても徐々に文民主導にシフトして来ていることが見受けられると思います。結果として私の役割としてはセクターレベルの国連軍と国連警察の司令官（中佐レベル）との調整が重要な役割となっています。

加えて、ニコシア民政部の仕事も続けており、北側と南側の市民社会グループの交流を促す仕事も近年大変重要となっています。北側に住むマロナイト系の方々やギリシャ系キプロスの方々、また南側に在住するトルコ系キプロス市民に対する人道援助も担当しています。特に新型コロナウイルスの影響で、昨年春から今まで、北と南を結ぶ 9 つあるチェックポイントにおいて、さまざまな移動制限が敷かれており、通常北と南の両側を往来する市民の生活に不便が生じています。例えば北側に住むトルコ系キプロス人で南側の医療を受けておられるの方々に対して今まで通り医療を受けられるようにするとか、高齢者に薬が行き届くようにするなど、民政部が当局と交渉しています。直近ではコロナウイルスのためのワクチンを南側から北側に住んでいるマロナイト系やギリシャ系キプロス人高齢者に届けるという交渉も担当しています。背景として、キプロス共和国である南側ギリシャ系のキプロス政府は「北キプロストルコ共和国」を承認していないため、両者が外交ルートを通じて直接話すことがありません。

従って、実務レベルでは民政部の私と上司が間にはいり、両当局の意思疎通を図っています。政治的に難しい問題になると特別顧問、事務総長代表が大臣、大統領レベルと交渉して問題解決にあたることもあります。

Q. 前回の国連フォーラムのインタビュー時は 2007 年で、ニューヨークにいらっしやいました。その後、現職までのキャリアについて教えてください。

2009 年にフィールドミッションにランクが上のポストがあり、政務官として国連スーダンミッション (UNMIS) に着任し、その後は国連南スーダン共和国ミッションに異動し、合計 3 年半ほどアフリカにいました。当時ちょうど南スーダンの独立投票の時期であり、南スーダンの国づくりのミッションにも参加できたことは素晴らしい経験でした。実は大型でマルチなミッションというのは東ティモールやコソボでも経験していたので、仕事自体では目新しいことは特になかったのですが、アラブ圏やアフリカでの文脈で仕事をしたことがなかったので、その意味で学ぶことが多かったと思います。当時、南スーダンではインフラが整っておらず、イベリア半島ほどの国土で舗装道路が 60 キロもないような状況で生活自体は苦勞しましたし、奇妙な病気にかかって現地病院に入院すると言う経験もしました。ただ不思議とマラリアにはかからなかったことは有り難いと思っています。日本から自衛隊の派遣団がくる時期とも重なって、自分なりにミッションと自衛隊の架け橋になれたのは良い経験だったと思います。

その後、キプロスに移ることになるのですが、実はキプロスのミッションは全く念頭になくニューヨーク時代に隣の部署の部長さんで知己を得たりサ・バッテンハイム（当時の UNFICYP の事務総長特別代表で、現在のフィールド支援局次長補）に興味はあるかと聞かれたのがきっかけでした。政務官ではなく民政官のポストだけれども、政治的折衝もできると聞き、ちょうどアフリカ勤務も 3 年目で次のポストを探しているときでしたので興味を持ち特別顧問と民政部チーフによる面接を受けました。実は当時は、ロスター制度が導入された最初の頃で、採用担当のマネージャーがロスターから直接人を雇える状況だったので、このポストは国連人生で初めて応募せずにオファーをいただいたものでした。今ではロスターを使う場合でも空席広告に応募する必要があるのですが、このようなことはありません。キプロスにはもう 8 年になるのでいろいろポストは探して応募している状況ですが、なかなか次が決まらないですね。

Q. 原田さんはPKOで長く働いていらっしゃると思いますが、PKOで働く魅力や、国連で働くことの意義などについてどうお考えですか？

魅力としては、まず自分の興味を生かせるという点でしょうか。平和構築、PKOのポストを探したのはほぼ個人的興味からです。学生時代も安全保障関係を学んでいましたし、学生だったころは国連の文脈では安全保障問題がクローズアップされていたのです。個人的関心と、実際現地でも働きたいという希望もあり、どうにか入り口を見つけ入りました。二つめとしては、いろいろな地球規模の問題があるなかで、PKOというひとつの地球規模の問題に携わり、現地の人々の役に立っているという（自己満足かもしれないけれど）プロフェッショナルとしての満足感。最近はやはり時代が変わるにつれて、国連の見られ方も変化していますし、安全保障理事会レベルで大国の利益が衝突してなかなか合意が生まれないと嘆かれていますよね。そのなかでも人道援助の問題については、政治に関わらずお手伝いできる要素がキプロスのミッションにはあり、人道援助を通じて、現地の人に感謝されることも経験し、そういうときにはこの仕事を続けていて良かったな、と思うことはあります。

長い間、国連に勤め海外で働いていると、仕事の文脈だけでなく、先進国にいたら経験できなかったこともいろいろありました。例えば、2003年のバクダット国連本部爆破事件では、特別代表であったセルジオ・ヴィエラ・デ・メロをはじめとして多くの同僚が亡くなり私の知人らも巻き込まれました。一番ショックだったことは、2010年のハイチ地震の際に、とても親しい大切な友人が何日も見つからず人生で一番辛い思いをしたことでした。ご両親や弟さんの気持ちは到底推し量ることはできませんが、いまでも1月12日がくると気持ちが沈みます。こういう経験をしてしまうのも国連にいるからなのかな、と思うこともあり、開発途上国で働くということは危険のリスクと向かい合わせで仕事をしていることだと思ふことが多々あります。

Q. 長く国連で働くなかで、自分が大事にしている価値や、自分の核になっている言葉とかはありますか？

哲学的ですが、我々も自然の一部というのは意識します。山をみると緑があって木が生えていますよね。葉が枯れて、落ちて、土のためになってまたそこか

ら新しい植物が生えてきます。自分は葉っぱのような感じで、次の世代とか何かのためになり、次に生まれるものの役に立てたらいいな、と思います。それぞれみんな役割があると思いますが、私の場合は興味のある国際関係、平和維持活動という分野で、そこで働いているのが自然だと感じますし、そこで社会や人の役に立てたら本望です。

Q. 原田さんが仕事をしていく上で大事にしていることは何ですか？

真摯な態度で、真心と誠意をもって誰にでも接することを心がけています。年もとってくると怒りっぽくなる、とよくいわれますよね、だから怒鳴ったりとか悪口いったりとか、難しい人と言われないように気をつけています。国連にはいろいろなバックグラウンドの人がいて、国籍だけでなくプロフェッショナルとしての仕事の文化も多様です。私は警察官や軍人と働く経験で、彼らのもつ「文化」との違いを強く感じました。経験が増すにつれて奢りのようなものが出てくる気がするのです。そういうことのないように、耳を傾け、人のいうことをよく聞き、辛抱強く仕事をする、ということを中心にしています。

Q. これからのキャリアプランについて教えてください。

平和構築維持活動、平和構築分野は大変な時期にさしかかっていると思います。先日友人がメールで送ってきた、Global Observatory というサイトの記事 (<https://theglobalobservatory.org/2021/01/downsizing-survivor-syndrome-in-un-peace-operations/>) によると、2018年12月から2019年12月までの間に平和維持活動に関わった文民スタッフが14%縮小しているそうです。この数字には1,440ポストのカットが予定されている撤退予定のダルフール国連・アフリカ連合同合同ミッションは含まれていません。過去5年では36%、10年のスパンだと45%縮小されているそうです。そんななか、最近ニューヨークから中近東に移動した国連幹部職員の方と話す機会があり、その人にまだ当分キプロスにいることになりそうだね、と言われました。この記事が分析しているように、そもそもポストが減っているのです。

マクロレベルでみると、世界史的転換期に突入していると思います。そもそもPKOは西側の政治的戦略思惑の絡んだ紛争介入ツールだったと思います。それは米国をはじめとした主導国があつてのことであり、いままでは口とお金をだして

くるいわゆる「株主」のような存在が変化しています。いままで「大型株主」だった欧米諸国の国民総生産がいま世界で半分に満たない状況となり、パイがどんどん減っています。これ自体は富の平均化で悪いことではないかもしれませんが、これから影響力を強めてくる国々が、果たしていままで西側が推し進めてきた政策を、国連を通じて追求してくるのかどうかは疑わしいと思います。平和構築の問題は減っていないので、従来の PKO に変わる新しいやり方がでてくるかもしれないし、西側の戦略的利益もかわってくるかもしれませんね。ミクロのレベル、つまり私のレベルでは、個人的には若い頃は無我夢中で知らない世界を目指し仕事をしてきました。知らないから面白くて挑戦もできました。どこの職場でもそうでしょうけれど、国連でも長くなると良くも悪くも予測がついてきます。どんな感じの仕事かも調べたり、上司や同僚に聞いたりもできます。そうすると、同じような仕事を続けていていいのかと考えたり、家族のことや子供のこと、高齢の両親のことも考えます。まさしく岐路にたっている気がします。ポストには応募していますが、国連や PKO にこだわらず、オープンに自分の興味のある分野、専門的スキルが使える人のために役にたてる分野があれば視野にいれていきたい、と考えています。

Q. いままでポストを獲得されていくなかで意識して取り組んできたことはありますか？

特に意識して取り組んだことはないけれど、振り返ってみると、人との関わりが重要だったと思います。キプロスのポストはバツェンハイム氏に声をかけてもらわなければ実現しませんでした。ニューヨークのコソボ・デスクのポストは、コソボミッションにいたときに本部との調整役をしていたため、本部に対して exposure がありました。東ティモールも副代表であられた長谷川さんにお声をかけていただきました。このように人脈というかご縁が影響していたと思います。国連が組織化されたとはいえ、実際採用の際に知っている人を雇いたがる傾向はあると思います。知らない人を筆記と面接だけで採用するというのはハードルが高く、何十人いるなかで知っている人が候補者になれば、知っている人を採用したくなる心理はあると思います。そのなかで日本人として不利なのは幹部の日本人が少ないのと、潔癖なのか逆に日本人で固まらないようにしていることかもしれませんね。他国の人をみるとあからさまなケースもありますし。そんななかでやはり変な評判がたたないように気をつけることは大

事だと思えます。

Q. 平和構築分野、開発分野で働くときにあったらいいな、と思うサポートやサービスはありますか？

私がこの分野で働きたい、と思った頃は平和維持活動局ができたばかりのころでした。訓練支援サポートをしてくれるところはあまりなく、突然現地についてそこで全て学ぶという感じでした。HPCには実際に現地のPKOを視察するプログラムがありますよね？（注：グローバルキャリアコースのこと）。準備する方としては難しいと思いますが、インターネットで教材や情報は手に入りやすく逆に情報過多になりがちですが、実際に現地の状況を肌で感じることはあまりないと思うので、そういう現地参加型の研修はとても貴重な機会だと思います。

Q. これから平和構築開発分野でキャリアを積んでいこうという方たちへメッセージをお願いします。

私が国連に入るくらいの頃から、21世紀はアジアの世紀だといわれていました。その頃は実感がありませんでしたが、いまはまさにそれが現実味を帯びていると思います。これから世界を目指すみなさんには、アジアの一員として平和構築、開発を含めた様々な分野で活躍できるチャンスがあります。また国際機関は女性への機会均等が加盟国に見本を見せる形でよく実践されていると思いますので特に女性の方々、ぜひ機会を逃さず希望をもって、いろんな人のために役に立ちたいという志のある方は、チャレンジして行ってほしいと思います。